HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Effect of corrective long spinal fusion to the ilium on physical function in patients with adult spinal deformity

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 亮 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3193

論文審査の結果の要旨

成人脊柱変形に対する矯正固定術施行患者における、術後の身体機能への効果を検討することが目的である。2013 年 8 月から 2014 年 9 月までに成人脊柱変形に対して矯正固定術を施行した 47 名を対象とした。対象を重症群（++群：sagittal vertical axis (SVA) ≥95 mm かつ pelvic tilt（PT）≥30°）と軽症群（0+群：SVA <95 mm または PT <30°）の 2 群に分類した。術後リハビリテーションは、入院時は 40～60 分/回を週 5 回実施し、退院後は歩行、筋力増強、ストレッチングの自主トレーニングを漸増的に増やすように指導した。評価項目は歩行時の腰背部痛（visual analogue scale による評価）、下肢筋力（両側膝関節伸展、股関節屈曲）、timed up and go（TUG）、10m 歩行時間、6 分間歩行試験とし、術前、退院時、術後 6 ヶ月、術後 12 ヶ月に評価した。健康関連 QOL として、腰部の障害を評価する Oswestry Disability Index（ODI）、側弯症等の症状を評価する Scoliosis Research Society-22（SRS）についても評価した。研究には、重症群 14 名、軽症群 16 名の計 30 名が参加した。歩行時腰背部痛は、術前と比較して退院時、術後 6 ヶ月、術後 12 ヶ月に有意に改善した。また、6 分間歩行試験、TUG も、術前と比較して術後 12 ヶ月に有意に改善した。さらに、健康関連 QOL である ODI と SRS は術前と比較して術後 6 ヶ月、術後 12 ヶ月で有意な改善を示した。重症群は軽症群よりも術後 12 ヶ月において、6 分間歩行試験、10m 歩行時間、TUG の改善値が有意に大きかった。

審査委員会は、成人脊柱変形患者に対する矯正固定術によって身体機能が改善することを初めて明らかにしたことを高く評価した。また、高齢患者に対する矯正固定術の効果に関する報告は国際的にも希少である。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者　　主査　尾島　俊之
　　副査　阪原　晴海　　副査　難波　宏樹